

七、随筆

(1) ハレー彗星をもう一度

〔桜蔭会報〕五五号へ寄稿

昨年の夏は、比較的炎天続きで、東北では五年振りにお米が豊作だそうですが、この豊作にあやかっただけか、この老生も昨年満八十八歳の米寿を迎え、去る四月二十五日には、横浜高等工業学校の初代校長、煙洲鈴木達治先生の門下生から成る煙洲会（代表は菅要助氏）が、不肖私の為に、老生の米寿と拙著『煙洲先生と横浜』の出版記念とを兼ねて、盛大な祝賀会を、川崎の駅ビル五階の宴会場で催して下さいました。

その折、鄭重な御祝辞や記念品まで頂戴しましたことは、私にとり、正に喜びの二重奏でありました。

丁度この祝賀会の当日、午前七時四十分からTBSのラジオ放送で、この老生の声は僅か三分間位の短い時間でしたが、電波に乗って流れました。それは、横浜在

住の八十八歳の老人が若かりし頃、ハレー彗星を見たという体験談でした。私が神中の二年生になったばかりの頃の話です。

この彗星が、七十六年を周期として地球上から見えるというので、非常な期待を以てというよりも、この彗星との衝突で、われわれの地球が壊滅するのではあるまいかと不安の念にかられ気の早い連中は、地下壕まで掘るといふまるでこの世の終りを思わせる騒ぎでした。

この時自分は伊勢佐木町通りのわが家（新富亭）の三階の手摺りに乗り出して、東の空にまるで水族館の水槽内に泳ぐ細長い不思議な魚のようなものを見たのです。全く夢幻的なものでした。

こうした体験談が電波に乗ったのですが、一体、誰が、この私が明治四十三年、神中の二年生の時、この彗星を見たという情報を流したのであろう？

このTBSのラジオ放送は、日本ハレー彗星協会の近況報告を述べて、新会員を募集するための宣伝でした。

それにしても、情報時代に活躍するこのTBSが何処からネタを仕込んだのであ

ろう？　そもそもインタヴューのネライといつかミソは当年八十八歳という老骨の私で、日本ハレー彗星協会宣伝用のダシに使われたことは事実である。

この謎は、前記四月二十五日の祝賀会の当日、やっと解きました。

それは、私が、昭和四年九月十一日付で、横浜高等工業学校教授になりました時、同年四月に初めて創設された造船工学科の第一回卒業生石川久能君が、前記祝賀会の始る直前に、私のところに参りまして、ニコリ笑いながら一通の封筒を私に差し出しました。

その時、私は、お祝いの御挨拶だろうと思って、その場では開封しませんでした。が、会が終わってからゆっくり拝見しようと、開封して、その内容を読んでも見ると、こんなことが書いてありました。

それは、石川君が、私には内緒で前記日本ハレー彗星協会へ、金三千円の入会金を支払って、私を同協会に加入する手続きを取ってくれたのでした。この新会員は横浜在住の当年八十八歳の老人、しかも明治四十三年にハレー彗星を見た十九世紀生き残りの男だと分かり、早速、TBSに通報したものらしい。

私は、石川君による御厚意の秘密を知らぬままに、前記祝賀会での謝辞の終りに、「もし上よりのお恵み、天寿を頂けるものなら、再来年（一九八六年）にもう一度ハレー彗星をこの眼で見ることが念願です」と述べました。

前回、即ち一九一〇年には、中学二年生の私にはハレーという天文学者が如何なる人物かも知らず、ロシアの文豪レフ・トルストイや米国の諧謔小説家のマーク・トウェインがこの年に死んだことも知るよしもなかったが、その後、トルストイの『戦争と平和』という傑作や、例の松井須磨子が『復活』という劇で歌ったカチューシャの歌が日本の津々浦々にまで広まり、また、マーク・トウェインの『トム・ソーヤの冒険』が少年の空想をふくらませたことなどを思い合わせると、是等の作家に興味をもつようになりましたが、この偉大な二人の作家はハレー彗星を地球上から見ることの出来た機会（前回は一八三五年）に二度も恵まれながら二回ともその好機を逸している。

それに反して、この私は「ハレー彗星をもう一度見たい」という念願を抱いています。然し今度は日本では見れません。出来れば濠州のシドニーまで出かけたいと

思っております。シドニーが世界中で最適の地だそうですから。

最初に、昨年はお米が豊作と申しましたが、私もその豊作のお蔭で、去る九月十五日の敬老の日には、横浜市長と神奈川県知事の御二人から御祝辞や記念品まで頂戴しましたが、九月二十二日には県の水曜会から、米寿、喜寿を迎えた者及び、秋の叙勲の榮に浴した方達が御招待を頂き、長洲知事から御祝辞や記念品を頂きました。

その際、右代表として老生が謝辞を述べましたが、ここでも、「ハレー彗星をもう一度見るために、シドニーへ行こうと思っております」と結びました。

お祝いの食卓では知事の長洲先生の隣りに坐って、この聰明な昔の同僚としばらく歓談しましたが、最後に、知事さんは「是非シドニーへお出かけなさい」と私を励ましてくれました。

(四) Eureka !! ハレー彗星にシンドニーで再会

〔弘陵造船航空会会報〕第十二号へ寄稿〕

拙著『あの日あの時』の中にある「海外旅行の今昔」は、自分のこれまでの体験談であるが、大正十三年、関東大震災の翌年、妻子を信州の叔母のもとに預けて、私は米英への留学のため、故国を離れた。

十二日ばかりで太平洋を横断して、横浜からシアトルに渡った直後、日本に残した妻子を直ぐ呼び寄せる予定が、排日法案通過のため、駄目とわかり、シカゴ大学の留学は、サマー・エキステンション（夏季講座）だけで切り上げ、ニューヨーク、フィラデルフィア、ウォシントン、ボストン等の東部を駆け足で通り、好きな野球見物では、三カ月のシカゴと十日間のニューヨーク滞在中に、六十本の本塁打記録をつくった当時全盛時代のベールブルースを見ることが出来た。

この東部旅行を終って、カナダのケベックへ行き、僅か二泊したホテルの窓から夢幻的なオーロラ（この地方では Northan light と呼んでいる）を見た感激はこの旅行中の特筆すべき思い出である。

ケベックから加奈陀太平洋汽船のエンプレス・オブ・スコットランド号で大西洋を七日間で渡り、英国のサウサンプトンに上陸した。この船は第一次世界大戦の結果、独逸から分捕った船で、わが東洋汽船の太洋丸の姉妹船（二万五千トン）だとのことであった。

大正十四年五月、ロンドン大学の留学を終り、帰途には、リバプールに近いパークンヘッドから「バターフィールド・アンド・スウィヤー」つまり、「ザ・ブルー・ファネル・ライン」通称、「青筒船」のピラス号（因に同会社の船名はギリシャ神話の英雄名からとったものが多い）という貨物船の二等、僅か七十五ポンドの船賃で、約一カ月半がかりで神戸に帰って来た。この船旅は、地中海を経て、スエズ運河を通り、インド洋を越えて、西洋から東洋へと、地球を一周する大旅行となった。

この船旅は、どんなに若い日本青年の視野を広げてくれたことか。僅か十二〜三時間でヨーロッパへ行ける今日、シドニーまでの九時間の飛行は余りにも物足りない旅で、窓外には雲の流れが見えるだけ、全く五里霧中である。

ただ今度の旅行は、老生にとって、生涯にハレー彗星を二度見ようというアンビシアスな旅で、その点では記念すべき旅行である。

近畿日本ツーリストの企画によるもので、同行の孫の一人が手続き一切をやってくれたので助かった。でも自分のパスポートが五月一杯で切れるので、更新の必要上、自分で山下町まで出かけて旅券の申請手続きをした。億劫ではあったが、これで、どうやら、もう二、三度は海外旅行が出来そうだ、と若返った気持になった。

一行は娘二人と孫娘二人の都合五名の同勢で首尾よく目的を果して帰浜することが出来た。

シドニーは、老生が少年時代からあこがれた都市だ。海の青と、背後の小高い丘に立ち並ぶ紅い屋根の家並みが、良く調和して一幅の絵である。そうした紅い屋根の連続模様が郊外まで続いて、この土地特有のユーカリ並樹とが良くマッチしている。

ユーカリと云えば、シドニーからハレー彗星の観測地、クーナバラプランに至る約四五〇キロの間には起伏する丘陵があつて、最高約一、〇〇〇米の峠まで、この

ユーカリの密林で被われ、これがブルー・マウンテン (Blue Mountain) と呼ばれている。この名称の起原は、夕日に、ユーカリの密林が照り映えて、青々と光り輝き、実に美しいからだそうだ。

トマス・クックの観光バスはこの峠を越えて観測地へと走る。このブルー・マウンテンに到るまでには草原が幾つもあり、中には立派な柵をめぐらした競馬場もあった。ガイド嬢の話では、あのフィリピンの元大統領、マルコスの所有地とのことであった。老生は、これを聞いて、「マルコス」じゃない、「まあこすい」と思った。

クーナバラプランでは二回ハレー彗星を観測した。零時から午前三時半までである。

空を仰げば満天の星。天の川も南十字星も実にきれいだ。土星も美しい。唯惜しむらくは、月が余りにさわやかである。この月の下方に一段と輝く星が一つある。それは火星だ。この火星の右方へ視線を移して行くと、そこに微かに怪しげな光を放つ星がある!! それがハレーだ。一九一〇年のときのように明瞭には見えない。

然しこの眼でその姿を捉えることが出来た。そのとき、思わず、アルキメデスがある発見の喜びに放ったという言葉、「Eureka」と口ずさんだ。「やったぞ」という訳である。

自分は二回ともこの彗星に吸い込まれるように瞳をこらして見据えるのであった。兎に角、わが生涯においてハレー彗星を二度観ることが出来た。これは、全く上よりのお恵みである。